フロイトによる心的人格の構造図の意味と誤解

Freud's figure of psychical personality structure: Its implications and misinterpretations

○高橋美保[1]・仁平義明[2]
（[1]早稲田大学大学院人間科学研究科・[2]白鷗大学教育学部）

キーワード: フロイト，心的人格の図，誤り

1. 問題の所在

フロイト(1933)の心的人格(seelische Persönlichkeit)の図は，自我，エス，超自我と意識，前意識，無意識の構造関係を，フロイト自身が図式化したものである(図 1)。

日本においてこの図は，原著の翻訳書以外にも多くの精神分析の概説書，学生向けの心理学の教科書，ひいては高校の倫理の教科書にまで掲載されており，数あるフロイトの思想の中でも，ポピュラーなものの一つである。

ところが, これらの書物に掲載されている心的人格の図は, いくつかの点で誤って描かれてるものが少なくない。その誤りは, 原著のそれに忠実に描かれていないというだけでなく, フロイトの思想を不正確に伝えるものになってしまっているものもある。

本稿では，心的人格の構造図の意味と，それがどのように図式化されているかについて述べ，日本のポピュラーな心理学書における代表的な誤りのパタンとその成り立ちについて検討する。

2. 心的人格の図の意味と日本の心理学書の誤り

心的人格の紹介図の誤りにはいくつかの典型がある。フロイトの記述や原図から読み取れる意味から，それらがどのように誤っているかを考える。

(1)タイトルの誤り

心的人格の図を掲載している心理学書の中には引用元として「(Freud, 1933)」を示しているにもかかわらず，図のタイトルを「心的装置」(seelischer Apparat) としているものがある(図 3)。これは心的人格の図の土台となったと思われる『自我とエス』(1923)の中の図との混同である。フロイト(1933)の原図にタイトルはないが，本文中にはこの図を指して，”Die Strukturverhältnisse der seelischen Persönlichkeit”(心的人格の構造関係)とある。よってこの図のタイトルは「心的人格」の図とする方が適切である。

(2)「自我(ICH)」の位置

フロイトによれば，自我はエスが変化させられたものであり，その“大部分は無意識的”である。原図では，前意識(的)と無意識(的)の境界を大きくまたぐ位置に描かれている。

ところが図 3 のように境界線よりも上の領域に「自我」の文字がおかれる場合がある(丸井, 1942 など)。これは単に写植や作図の事情によるものかもしれないが，自我が無意識的ではないという誤解を招く恐れがある。

(3)前意識(的)と無意識(的)の境界線と「超自我(ÜBERICH)」

原図の中央を横切る二本の破線は前意識(的)と無意識(的)領域の境界であり, うち一本は長く伸び左端まで達している。これにより超自我は前意識的・無意識的領域にまたがっていることが示される。フロイトによれば“超自我はエスのうちにふかく入りこんでおり，そのため自我にくらべて意識から遠く離れている。”ところが図 2，図 3 のように，この二重破線の左端が，超自我と自我を分ける矢羽根状の線で遮られてしまうという不正確な描かれ方のものが少なくない(1933 年の英語版も)。なお、この矢羽根状の線はフロイトのいう“分裂”あるいは“割れ目”を示唆していると考えられる。

(4)「verdrängt(抑圧された・被抑圧的)」の訳語の位置

原図の中央を横切り右端に伸びる破線から折り返すように左斜め下に伸びる二本の実線の上側に verdrängt(抑圧された)と書かれている。これは自我による意識または前意識(的)の抑圧という力動を示している。抑圧されたものはこの二重実線の下部に押しやられ無意識(的)となる。

ところが,「verdrängt(抑圧された)」が「抑圧された無意識(もの)」と訳されている例がある(図 2)。フロイトの記述に従えばこの斜めの二重線は抑圧という力動を示していると思われる。1923 年の図では，「抑圧されたもの」（本文では Das Verdrängte，図では“Vdgt”と略記）は，フロイトが“…自我からはっきりと分かれていて，エスを通じて自我と連絡することができる”と述べているように，二重線の下側に書かれている。それゆえ,「抑圧されたもの」とするのであれば，二重線の下側に書かれねばならない。その意味で，図 2 は明らかに誤りである。また図 3 のように，二重線がストロー状に外部に突出しているのも誤描である(外林, 1958 など)。

(5)　図の着色

フロイトは，心的人格の図は原図のような境界のはっきりした輪郭線で描かれるものではなく，印象派の描くような色域のぼやけた絵の方が妥当だとしている。図 3 のような色分けは必要以上に領域の区分を強調しているばかりでなく,“エスの身体的なものへ向かっている末端は開いていて”という記述とちがい、エスの下部が閉じている印象を与えかねない。

3. 誤りのルーツと成立過程

本稿で取り上げた誤りのパタンは，先行書からの図の孫引きの過程で生じたと考えられる。日本で定番の訳書よりも先に心的人格の図を日本に紹介したのは丸井(1942)であるが，この図に誤りのパタンのルーツの一つをみることができる。

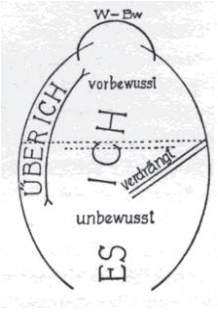

図 1　Freud, 1933

図 2　宮城, 1959

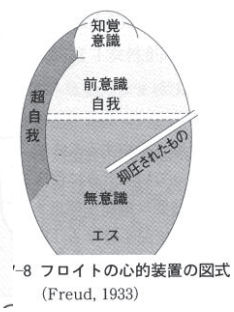

図 3　鹿取他(編), 2009

文　献

Freud, S. 1923 Das Ich und das Es. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Leipzig.

Freud, S. 1933 Neue Folge der Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Wien. s.110.

鹿取廣人他(編) 2009 心理学(第 3 版) 東京大学出版会 p. 233.

丸井清泰 1942 精神分析学的性格学, 現代心理学第 4 巻 性格心理学 河出書房

宮城音弥 1959 精神分析入門 岩波書店 p.161

(TAKAHASHI Miho, NIHEI Yoshiaki)